

貧困、敵意、飢えと苦痛に満ちた街。
深刻な問題を抱えた何子という若者の住む街。
1980年、自分の持ち物の全てを、レンタルの小さなトレーラーに詰め込んで、
ひとりの男がニューヨークのブルックリンにやって来た。

20年後、彼はニューヨークを変えた伝説の人と呼ばれた。 そして今、その働きは世界を変える。 彼の名は、ビル・ウィルソン(Bill Wilson)

母親は、戻って来ませんでした。

1961年の夏のことでした。
母は私に、「ここで待っていなさい」と言いました。
フロリダの暑い太陽の下で、大通りのコンクリートの配水管の上に座り、私は、母が戻って来るのを3日間待っていました。
しかし、母は二度と戻って来ませんでした。



ビルの人生を変えた、たったひとりの人。

3日間同じ場所にいる私に、ひとりの人が声をかけてくれました。
「何か食べるものいらない？ それからねえ、青年キャンプに行かないかい？」
「それ何？」
「きっと君も気に入るよ。君と同じ年の子がたくさんいて、スポーツをしたり、礼拝もあるんだ。」
デイブは、参加費を支払って私をキャンプに参加させてくれたのです。
青年キャンプの水曜日の夜、私は、自分の人生を全く変える、何か大切なことを聞きました。
生まれて初めてイエス・キリストの十字架と復活の話聞き、祭壇の前にひざまずいて祈りました。
「イエス様、私の罪をお赦しください。私の人生をあなたにおさげします。」
その晩の、その瞬間から、私の未来は決して今までと同じではないということが、なぜか私にはわかりました。
成長して牧師となった私は、ブルックリンにやって来ました。
ぼろぼろの中古のバスを借り、子どもたちを集めて教会学校を始めたのです。
子どもの数は瞬間に増え、すぐに2千人規模になりました。



ビジョンは絶望へ…。

順調そうに見えたスタートでしたが、私がどれほど熱心に、命がけて働きを進めても、絶望的な事件は次々と起こりました。
あまりに子どもたちが集まるので、建物や設備の消耗は激しく、快く会場を貸してくれる人はいなくなりました。やっと借りた建物は、暖房が使えず気温零下8度。
奇跡的に与えられた献金で手付金を支払い、建物を手に入れることができました。
しかし、建物の維持管理やボランティアスタッフの食事、そのほか日々の運営費を払うだけの収入の見込みはありませんでした。
私に与えられているのは、非常に多くの貧しい子どもたちだけ。98ドル16セントが私の教会の全財産でした。
私の手元に次々と送られてくる請求書のことなんて、誰も気に留めてくれませんでした。建物を抵当とした借金は膨らむばかり。
ついに、その建物を手放さなくてはならない時がやってきました。



1984年2月24日、奇蹟の日。

しかし、それは終わりではなく、始まりだったのです。
以前一緒に働いていたスタッフが、自分たちの製作している映画に、私のインタビューを入れたいと言ってきました。インタビューの後で彼は言いました。
「私たちには君にあげるお金はないけれど、君のために喜んで映画を作りたいと思う。もちろんただで。映画が役に立つだろうか？」

